川尻一丁目の荒れ間のキツネ

昭和六十二年八月五日号

川尻一丁目のため池

須津地区の川尻一丁目に、農業用水のための池があります。今は地下水をポンプで吸い上げていますが、昔は清水がわいていました。

今回は、この池の付近に伝わる伝説「荒れ間のキツネ」を紹介します。

二匹の古ギツネ

川尻一丁目の中で、岳南鉄道のすぐ南側の地域を「荒れ間」と呼んでいます。ここには古くから大きな池があって、アシやマコモが生い茂り、その池の周りには林がある寂しいところでした。

昔、ここに人を化かすのが上手な「おせん」「おこん」という古ギツネが住んでいました。そして何人も化かされたので、人々は怖がっていました。

ところが、神谷に住む元気のいい若者が、「キツネが人を化かすなんてことがあるもの

か。おれは絶対に化かされないぞ」
と威張って、勢いよく荒れ間の林へ出かけていきました。

キツネの嫁入り

ちょうど林のそばまで行くと、どこからともなく、大変にぎやかな声が、がやがやと聞こえてきました。
「さては、出たな」
と思って声のする方へそっと近づき、道端にしゃがんで待ち構えていました。するとにぎやかな声はだんだん近くなって目の前までやってきました。よくみるとそれは花嫁の行列でした。若者は、(どこの家の祝言かな、それにしても美しい花嫁だなあ)と、うっとりと見とれていました。

頭をそられた若者

花嫁の行列はにぎやかな笑い声を残しながら、だんだん遠ざかって、ついに見えなくなりました。
「あっ、今のはキツネの祝言だったかもしれない」と気がついた若者が、ふと頭へ手をやってみると、今までふさふさしていた頭の毛が一本もなくなって、つるつるの頭にそられていました。(鈴木富男著「富士市須津の史話と伝説」より)